[退職記念講演]

「華僑」研究のすすめ

可児　弘明*

近藤龍夫 学部長　可児先生は、慶應義塾大学文学部史学科を卒業され、同大学大学院で修士・博士課程を終えられたあと、そのまま大学に勤められて、教授におなりになりました。現在は名誉教授で、1998年に本大学にお見えになられました。

可児先生は日本における「華僑」問題の第一人者であります。私は大学にお世話になるまでは新聞記者をしておりました。いまから34、5年前になりますが、香港に4年ばかり駐在して中国問題などを報道していましたが、その香港に赴任する前に、何か香港について勉強しなければならないと思って本屋さんなどを見ておりましたら、そこに岩波新書の『香港の水上居民』という可児先生がお書きになった本があり、さっそく買い求めて読んだ記憶があります。

いま香港にはたくさん大学がありますが、当時は香港大学と香港中文大学の二つしかありませんでした。香港大学は英語で授業をし、香港中文大学は中国語と英語のバイリンガルで授業をする大学でした。可児先生は1965年から66年、67年から69年、71年から73年にかけて、三度にわたって中文大学に研究助手、客員講師として在職され、その間にいろいろと水上居民――このなかでご存じの方があるかどうか、中国の留学生は分かると思いますが、水上生活者は「蜑民」と言われていました。一種の差別用語の感じもしますので、いまはあまり使わないかもしれませんが、その当時は「蜑民」と言っておりました。船の上で生活をしている人です――を丹念に研究されてまとめられたのが、いま申し上げた「水上居民」の本です。

可児先生は香港に大変愛着がおありのようで、最近では『もっと知りたい香

＊かに・ひろあき：敬愛大学国際学部教授
Professor, Faculty of International Studies, Keiai University.

港』という、弘文堂から出ている本を編集されたり、九龍城という治外法権的な、大変物騒な地域がありましたが、その九龍城を写真で記録に留め、研究資料とする『大図解　九龍城』――1997年に岩波書店から出された本ですが――の監修、解説をしておられます。

きょうは華僑の問題について、「『華僑』研究のすすめ」として、大変興味のあるお話が伺えるのではないかと思っております。どうかゆっくりと先生の含蓄のあるお話を伺っていただきたいと思います。では先生、どうぞよろしくお願いします。

過分なご紹介をいただきました。結婚式の披露宴とか退職記念の場では褒めていただけるようですが……私は実は平凡、胡乱な教師でございまして本日の予定が決まっていたのですが、先週末、千葉の町をうろついておりまして風邪を引き、まだきょうも風邪を引きずっている始末です。

さてきょうは「『華僑』研究のすすめ」ということでしばらくお付き合い願うことになりますが、実は「華僑」研究の本筋は経済学とか政治学分野にあります。ところが「華僑」研究には政治学や経済学以外の分野にも十分に切り込める余地があり、またそれなりのリターンがある分野ではないかと思います。さらに研究者だけではなくて、外国からの移民と隣り合って暮らす時代に他民族とどう賢く付き合うかといった面で一般市民にとっても「華僑」研究は有益ではないかということをお話しするつもりです。もしサブタイトルをつけるとすれば「コモン・イントレスとしての『華僑』研究」という、誰でも興味を持って損のない研究分野であるということです。ただ私は、同僚の宮本先生が年中「お前の話は言語不明晰で分かりにくい」とこぼされ、また櫛田先生には、私の話には「。」と「、」がないので聞きづらいと御注意を受けております。大学の教員には教員免状がありませんので御勘弁いただきますが、なるべく気をつけてお話しするつもりです。

1. 水上からアジアを見る

きょうはたくさんお集まりなので、自分のことを自分で話すのは多少気

恥ずかしいのですが、まず私が「華僑」研究へ辿りつきました道筋を少しお話しすることから始めたいと思います。私は学部の卒業論文は、タコと考古学をテーマにしました。本学年度で退職致しますのは昭和7年生まれ、それから昭和8年の早生まれ組ですが、この世代はちょうど中学校の1年生のときに終戦を迎えました。したがって、突然軍国主義から自由主義へ、天皇制から民主主義へと世が激変しました。古代史の神話が全面否定されて、土の中から発掘される考古学の遺跡・遺物が唯一正しい歴史だという時代の中学、高校生であったわけです。

考古学がブームとなり、あるいは日本民族の起源があらためて議論の対象となった時期で、たくさんの考古少年、考古青年を生んだわけです。私も最初に興味を持ったのは高校部活の考古学です。大学も史学科で日本各地の考古学の発掘に参加したのですが、そのうち考古学といえども完璧なものではないのではないか、という気がしてまいりました。というのは、考古学は出土したものが唯一物を言えるのです。貝塚を発掘しますと、イカの甲殻が出てきます。ですから日本の縄文人はイカを食べていたということが考古学上言えるのですが、タコのような何も骨を残さないものになると証拠がない。ですから考古学では縄文人はイカを食べていたがタコは食べていない、ということになるのです。どうもその辺に考古学の持っている限界があるのではないかと考えて、生意気にもそれを卒論のテーマにしようと意気込んで、タコをとる道具を調査した結果、縄文人がタコを食べていた可能性があることについて書いたのです。

ところがこの過程で一つ思い当たることがありました。タコというのは世界中たいていの海に棲息しています。ところがタコを食用とする民族は非常に限られている。普遍種の生物に対して人間の働きかけは必ずしも一様ではないのです。そうしたところから、普遍種の生物と人間のかかわりから何か文化の発生、あるいは文化の伝播という問題が切り取れないかと思い立ち、修士過程では鵜飼をテーマに取り上げました。ウという鳥は世界中たいていおります。ところがウを飼育して魚をとらせるという技法は、日本と中国にしかありません。ことによるとベトナムにも一部にあったか

もしれません。ヨーロッパでも一時期行われたことが一部にあったのですが、これは根づきませんでした。鵜飼は日本と中国にしか見られないのです。朝鮮半島でも全く知られておりません。どうして日本と中国だけなのか。両者の鵜飼は別々に発生したのか、それとも一方から他方へ伝わったのか。そういうことの検証から、あわよくば文化の発生、伝播の問題に踏み込めないかと考えたのです。これについては先行研究がアメリカにありました。ラウファー（B. Laufer）という学者です。ラウファーは日本と中国の鵜飼を比べて、ウの補充と飼育、訓練、技法などいろいろと検討して、日本の鵜飼と中国の鵜飼とは技法的に違い、それぞれ別々に発生したものであって、日本の鵜飼は外部からの影響を受けない固有のものだという仮説を唱えました。私はむしろ反対に、日本の鵜飼は稲作その他とセットで南中国から伝来したものだという立場をとりました。

伝来説を展開するためには、日本は島国ですから、中国と日本との間のミッシングリング（失われた輪）をつながないと、話に説得力がない。それでどうしても海上交通手段、つまり日本を取り巻いている海をヒトやモノがどのようにして渡ったのかという問題に触れざるを得なくなるわけです。私の主任教授松本信広先生は言語学・民族学者で東南アジア、日本の古代史に造詣の深い方でしたが、当時丸木舟の発掘を千葉県などでやっておられました。そういう関係もありましたし、また私が大学院で1対1で何年間か指導を受けました経済史学者、羽原又吉先生は日本の漁業史研究の開祖のような方でした。そういう先生方の影響下でタコ、鵜飼に続いて研究テーマの3番目になったのが「家船」（えふね）です。「家船」という居住様式は今日では見られません。私の学生時代がおそらく「家船」の最後だったと思います。この人たちは皆、陸上に土地や建物を持たずに、船に家財道具を積み、家族と共に漂泊的に海上を移動しながら漁業をしたり、海上輸送あるいは行商をしていたのです。九州から瀬戸内一帯、日本海では北九州から能登半島ぐらいまで分布しておりました。また中国大陸にも「家船」と同じような生活様式の人びとが分布していました。これが先ほど近藤先生がお話しになった「蜑民」（たんみん）ですが、とくに南中国に

たくさん見られたのです。その関係で前に述べましたミッシングリングをつなぐ期待が日本の「家船」、中国の「蜑民」研究にあったのです。しかし「蜑民」の方も中国が社会主義化してから陸上への住みかえ政策が進み、1960年代中頃に中国大陸で船住まいの生活様式がまとまって見られたのは英領であった香港とポルトガル領のマカオだけでした。それで大学院生の最後の年に「蜑民」研究のため香港中文大学の新亞研究所に留学することになりました。

「蜑民」研究についてはそれなりに私は一つまとめたのですが、香港工業化の影響を受けて「蜑民」本来の船住まいが急速に減少し、研究者にとっては理想的なフィールドではなくなってしまいました。一方、香港におりましてよく聞くのは、香港に網をかけると東南アジアが一緒にかかるということです。つまりそれほど香港と東南アジアは相呼吸しあって生活しているわけです。そのなかでとりわけ興味を引かれたのは、香港から出ていく広東人や客家の海外移民です。冷戦当時香港にいた日本人研究者は大方がチャイナ・ウォッチャーでありましたが、私は南指向の少数派の一人でした。海外移民に関心が移りました理由の一つは、私を香港で預かってくださった指導教授が陳荊和先生とおっしゃる、東南アジア「華僑」史の専門家だったことです。以後ゆっくりとですが「華僑」研究のほうに関心が傾いていったわけです。つまり私が申し上げたいのは、私の「華僑」研究は、私の研究歴のなかではきわめて新しい部分で本気で取り組むようになったのは1970年代中頃のことで、「華僑」が海外で守り続ける伝統文化の調査に参加したり、「豬花」（日本の唐ゆきさんに相当）研究の一次史料にめぐり合ってからのことです。もう一つ申し上げておきたいのは、私は歴史メジャーですが、タコ食文化、鵜飼慣行、「家船」、「蜑民」、「華僑」、どれもオーソドックスな歴史研究があまり取り上げないテーマです。歴史学者がみずからは取り上げないけれども否定もしないという意味から、いわゆる「歴史の第三構成要素」とされているものばかりです。文献史料にあまり姿を現さない瑣末な存在であったからです。

そういう分野のテーマで、おまけにテーマが次々と変わっているのでは

趣味人、好事家と思われても仕方ないのです。しかしそれではこの「業界」では生き残れないわけで、何か一つ理論武装とまではいかなくても、一応の整理をつけておかないといけないというわけで、「拡大と縮小」ということを持ち出すことにしています。近代科学というのはご承知のように、物事を拡大することで進歩してきました。これは疑いのない事実です。顕微鏡が出来ましたから、目に見えない病原菌が見える。そして病原菌が研究されることによって医学が進歩し、公衆衛生が発達したわけです。また天体望遠鏡が発明され、遠く離れて目に見えない宇宙の姿が分かってくる。そこから宇宙科学が展開していく。近代科学が拡大する技術に支えられてきたことは事実です。ところが逆に「縮小」する技術からも新しい知識がいろいろ生まれてくるわけです。縮小するには対象物から離れていけばよいわけです。地球からどんどん遠く離れて行って地球を見ますと、例えばアジアでは照葉樹林帯という、西日本の基層文化ないし伝統的な生活に非常に似通った文化のベルトが見えてきます。エコロジーの世界などは、物を縮小する技術、発想から生まれてきたものです。

この発想で地球を見ると、北半球の 60.7%、南半球の 80.9%はみな海なわけです。そして地球全体で言いますと 71%近くが海なのです。つまりどんどん地球から遠ざかって改めて地球を見てみると、人間が陸に住んでいるというのは錯覚であって、実は海に浮かんで生活しているという視点が出てくるわけです。そしてその海は人間の非常にいい活動の場であり移動経路でもあります。そしてその移動路を通って、人間というのはまことによくあちこち移動して広い地域を結びつけている。それで海、水界から人類の歴史を見るという視点も大切ではないかということになるわけです。私の場合で言えば、水上から東アジアを見てきたということで首尾一貫するわけです。

2. 歴史的な僑郷

海は決して人間の行動を拒み、交流の障壁となる存在ではなく、人間もまた海を恐れる動物ではないのです。海を使ってよく動き回る人間のなか

でも、中国人は顕著な存在です。19世紀の中頃から100年間に移動した人間の数が明らかにされていますが、アイルランドを含めたイギリスからは、1840年から1938年の間に1,830万人の人が移民しています。巨大人口国家のインドはもっと多く、1834年から1937年の間に3,000万人以上が海外に出ています。中国はインドに比べると少ないのですが、ほぼ同時期に1,700万人が出ています。アフリカ黒人奴隷が300年間に1,500万人ないし2,000万人と言われておりますが、それと比較しても中国人は非常によく動き回り、海外に出ていく民族だということがお分かりいただけるかと思います。

話が前後してしまいましたが、私は「華僑」と言ってまいりました。厳密には中国籍を保有したまま海外で暮らす人たち――つまりまだ中国の国民であるわけですが――を「華僑」と言います。これに対しそれぞれの海外居住国の国籍を取って、中国の国籍を放棄した人を「華人」と言って区別しています。この両者合わせて2,800万人です。また「華僑」「華人」から仕送りを受けている人、あるいは海外から帰国して余生を中国で送っている人もあって、これも「華僑」研究の対象となります。しかしきょうのお話では厳密な区別をしないで、「華字文化圏」で常識的にあるいはルーズに言われている「華僑」というイメージで話を進めてまいります。1996年の時点で日本の「華僑」人口は13万人です。今日では3倍ぐらいになっていますが、他の国と比べて、非常に少ないのです。マレーシア528万人(91年)、インドネシア500万人(94年)、タイ400万人(94年)などの数字が示すように、歴史的に中国人の移民先で主要だったのは東南アジアです。北米その他の地域に拡大するのは後のことです。

中国の移民は中国全土から平均的に海外に出ていったのではなくて、出身地に大きな特色がありました。台湾の対岸が福建省です。この福建省とそれに続く広東省、広西チワン族自治区が主に「華僑」を送り出してきた地域です。海南島の部分は1988年に一つの省として昇格しましたが、それ以前は広東省の一部でした。これら地域がどのぐらい「華僑」の故郷(僑郷)として独占的な地位を保っているかは、「華僑」親族と帰国華僑が

広東省 1,800 万人、福建省 520 万人、広西チワン族自治区 75 万人となっていて、この三者で中国総計の 87.5%を占めることからも推測できると思います。昔から圧倒的多数（海外移民の 8 割ぐらい）が広東・福建両省の出身者と言われるのと符合します。そこでこの二省の「華僑」研究から抽出できることをお話しし、それによって国際化社会を生きているわれわれに何を還元できるのかをお話ししたいと思います。われわれは天皇を国のシンボルとして「一世一元」、つまり天皇一代に一年号の暦を使っていますが、それとはよほど異なった民族だということがお分かりいただけるだろうと思います。その違いを知ることが、国際化時代のわれわれに必要だと私は考えています。

「華僑」は 11 世紀頃まず海上商人から始まります。ですから最初は「華商」から始まるわけです。ジャンクに乗って外国に行くわけですが、その造船と海運の先進地域は先ほどお話しした台湾の対岸の福建省です。「福建ジャンク」の名があるほどです。

千葉県は房総半島の南端に千倉というところがあります。いまから出掛けても今日中に帰ってこられるような、佐倉から遠くないところですが、そこに 1780 年（安永 9 年）に南京から元順号というジャンクが漂着しました。日本はご承知のように 1635 年から鎖国体制を敷きましたから生身の唐人（中国人）を見ることができたのは長崎の人ぐらいです。中国に関する知識はすべて漢学者が身につけた教養のなかに閉じ込められて、一般の人とは関わりを持たない時代です。ある人は錦絵、ある人は絵草子のなかに出てくる世界でしか唐人を知らなかった時代です。そこへ生身の唐人が 79 人も乗った船が漂着したというので、千倉海岸は大騒ぎになりました。江戸のほうからも、埼玉のほうからもぞろぞろ見物人が来て、千倉の海岸に俄造りの宿屋ができる、飯屋ができる騒ぎだったようです。千倉には 79 人が 1 ヵ月ばかり収容されていました。それで江戸周辺の各藩でも「これはいい海外情報だ」というので学者を派遣して筆談で調べさせる。あるいは絵描きを連れて行って、絵図に描き留めさせた関係でいくつかの記録を残しています。いまでも千倉に行きますと、元順号遭難救助の碑が

あります。その救助に千葉沿海諸村が総出で活躍した記念碑です。機会があったら、一度ご覧になることをお勧めします。

さて、いくつかある記録のなかに、元順号には何人乗っていて、どういう名前で年はいくつか、それに船での役割、出身地、信仰している神仏などを一人一人について克明に記録しています。それを整理するとよく分かるのですが、職業と出身地が密接に結びついています。船主、副船主、財副、随使というのは荷主もしくはその代理人、従者など商人グループだとお考えいただければいいと思います。その出身地はみな揚子江の下流に集中しています。これに対して夥長、総管、舵工、水手の68人が船を動かしていく航海士、船員、あるいは船員を束ねる人なのですが、一人を除いて全員が福建省籍となっていて、職業と出身地の重なりがよく分かります。

こういうふうに職業と特定地域とが密接にリンクしているのは、昔から中国社会を貫いてきた人的結合の大きな原則です。歴史時代だけではなく、いまでも「華僑」社会ではこういう人のつながり、あるいは行動パターンの原則がかなり確認できます。日本人はよく言われるように、会社人間ですから、帰属集団のなかに埋没してしまいがちですが、日本人に比べると中国人は個人主義的な性格が強いのです。個人主義というと誤解されがちですが、実は孤立した個人ではなく、社会関係を重んじるという大きな特色があります。つまり個人から社会、集団に向かっていくつもの絆を作っていきます。ある場合には宗族という血縁の絆、あるいは同郷という地縁の絆というように使い分けて、社会での活動範囲を広げていくわけです。その絆のことを中国人は「関係」（グワンシ）と言います（弘文堂『華僑華人事典』参照）。われわれの使う「関係」という言葉とはまた違って、同じ血のつながり、同郷のつながり、それから同業のつながりのことであって、これを「血縁」「地縁」「業縁」という言葉で言っております。最近ではこの三縁以外に、例えば信仰の縁とか特産物で結ばれる縁とか、いろいろな絆へと広げて多様になっています。例えば学縁、同じ学校の出身だということが一つの絆の中に入ってきているのではないかと思いますが、いずれにしても中国人固有の人的結合関係の基盤がよくうかがえるのが「華僑」

なのです。留学生の間でも地縁による結合関係は強いように思います。

いま話しました元順号は船長20メートルぐらいの小型の船です。ところが大型の外洋ジャンクになると200人以上が乗っていました。大型になっても同じように、出身地と特定の職業すなわち地縁、業縁の関係が認められることは同じです。もう一つ注意すべきことは、ジャンクは船ぐるみベンチャー精神の固まりであったということです。これは斯波義信先生などのご研究成果をお借りするわけですが、ジャンクはチャーター船で、各々の船にオーナーがいます。その船をチャーターして荷を持って貿易にいく海上商人がいます。同時に別の商人が何十人も、それぞれ荷を持って便乗していくわけです。ここまではわれわれにもよく分かるのですが、船を動かす航海士、上級甲板員、あるいは下級船員なども、ただ船を動かすだけではないのです。この人たちは、賃金は非常に安く抑えられていますが、それぞれに自分が海外で商う品物を持ち込むことを許されています。自分の才覚で海外で稼げる仕組みになっていたわけです。さらにその船員たちに出身村など同郷の人たちが思い思いの額を投資して、配当を期待するわけです。つまりこれは陸上の荷主から荷をあずかり、依頼先に届ける貨物船とは違い、船ぐるみのベンチャー、地域ぐるみのベンチャーであったわけです。福建省には昔から外国の船がたくさん来ており、また海上商業で成功した中国人のリッチな暮らしをよく知っているわけです。海が結びつける経済はただ国家貿易の朝貢貿易だけではなくて、身近なところにある貿易の利、海運の利をよく認識しており、それが冒険心とか進取の気風を養ったのです。

だいたい水運は陸運より3、4割安い、さらに海運は水運よりも7、8割安いそうです。コストが安くてすむ上、持っていく品物は東アジアの先進国中国製のブランド商品です。そして帰りには東南アジアの特産品を東南アジア各地、中国、日本で売るので、往復で儲かるわけです。しかし何といっても海上は非常に危険です。危険ですから、一航海ごとにベンチャー組織をつくるわけです。以前福建省廈門（アモイ）の昔話を聞いたことがあります。竹笹の葉っぱを紐で束ね港町の道を引きずって歩き、船が出る

ことを知らせたそうです。今思いますと、海上貿易に出掛けたい、投資したいものを募るサインであったのかもしれません。ともかくジャンクのベンチャー組織ができるわけですが、それはあくまで一航海限りの関係で、航海が終わると解散してしまう。でまた次の航海に出るときは、また別のメンバーで行く。そのメンバーが先ほど言ったような血縁関係、あるいは地縁関係、あるいは業縁関係で結びついていたわけです。

こういうことからお分かりになるように、ジャンク貿易では一人一人がいわばビジネスマン、事業主です。これが後世でも形を変えて残っているのは、中国人は賃金よりは出来高払いを好むということです。私が香港にいた頃には、エレクトロニクスの工場でもそうでした。工場というのは自分に機械を貸し、原料を供給してくれて、自分の作った製品を売ってくれるところだという意識が非常に強いと、小泉允雄さんが日経新書『香港』(1971年刊)でふれておられます。その後の歳月である部分は変わったかもしれませんが、賃金よりも出来高払いで、別の言葉で言えば能力主義、自分の才能をみがき、富を追求することを決して否定しない気風は変わらずに残っていると思います。それが中国人は金銭感覚に敏感だという印象をあたえるわけです。しかし同時に冷静な計算も働いており、徹底的に危険の分散も図るわけです。

少し傍道にそれますが、毎年12月に入る頃になると、台湾海峡にはボラが回遊してきます。それに備えて11月末頃から、海岸に小屋を作ってボラが来るのを待ちます。そしてボラが来ると、いっせいに沖に船を出すのですが、船、漁師小屋、網、流動資金など一切の資金が一船ごとに合資制で集められます。危険の分散をはかるためです。漁師もそうです。親子が一つの船に乗り合わせていて、その船が沈んでしまえば一家は終わりです。そうでなくとも、その船でボラが1匹もとれないと一家が干上がってしまいます。だから親と子は別々の船に乗り分けるのです。一方、船その他に投資する人も、一つの船が当たらなくては困るから、いくつかの船に資本を分けるわけです。具体的には船ごとに株の形で資本を共同で持ち、自分の出資額に応じた配当をもらうというふうにして、危険を分散しながら富

を追求するわけです。ちなみに、ボラの卵巣からからすみをつくります。

以上のことから分かることは、中国人の社会は個人主義と「関係」の世界であること、一人一人が「事業主」で個人が富の追求をするのを否定しないこと、賃金より出来高制、能力主義に徹していることなどですが、このことは今日でも基本的に変わっていないと思います。私は今学年「ブリッジ・プログラム」で留学生ばかりのクラスを持ったのですが、そのレポートのなかに日本のレストランと中国のレストランの違いを書いたものがありました。日本のレストランはお客さんの前で料理を作る。つまり作る過程を大事にする。そういうレストランばかりではないのですが……。ところが中国のレストランでは厨房が別にあって、出来た料理を持ってくるだけだと。その学生がレストランになぞらえて主張したかったのは学校の出席制度で、日本の学校の先生にとっては過程が大事で、毎回授業に出席し、先生によく相談する学生はいい点がもらえる。逆にいくら試験の成績がよくても、出席状態がよくないといい点をくれないというのです。この論点には実力主義というか、能力主義というか、一定した賃金よりは出来高という伝統思考が働いているというふうに感じました。

さて福建省はそのぐらいにして、広東省に移ります。広東は先ほど地図で見ていただきました。林語堂というアモイ出身の学者が広東の風土についてこんなことを言っています。「気力にも目立ったものがあり、男らしく食い、男らしく働き、進取の気性に富み、物事にこだわらず、金使いも荒く、喧嘩好きで、冒険的、進歩的で気が早い」(『我国土・我人民』)。これは男性について言ったわけですが、広東出身の人を見ていますと、男性だけではなくて女性もずいぶん強い、しっかり者、働き者だなという印象を受けます。というのは、王朝時代の広東に「食臘鴨飯」というこんな話があります。臘鴨というのは何かと言うと、鴨を一羽丸ごと毛をむしってから、塩漬けにして干したものです。それを鉤に掛けて店先に吊るしておくものですから、臘鴨飯を食べるというのは縊死、つまり首吊り自殺をするということです。さて嫁に出した女性が嫁ぎ先で縊死をしますと、実家の女性がみんなで押しかけて行く。そしてわめき散らしてお姑さんをいじめ

るわけです。挙げ句の果ては姑をつかまえて、嫁の棺桶の中に並べて寝かせる。これが「並死屍」で、役人が取り締まってもこの風習がなかなか収まらないとあります。

並死屍の裏には女性の非常に高い労働価値が考えられると思います。広東とくに農村は纏足（てんそく）をしていない女性、いわゆる「大脚」が多かったところだろうと私は思います。つまりそれだけ女性の戸外労働に社会的な承認があって、この点では麦作の華北とはだいぶ違うわけです。そういう強い女性のなかから昔はときどき海賊の女頭目が出てきます。外人などが撮った、長いキセルをくゆらして男どもを従えた写真が残っています。

それから先ほど言った広東省で船に住んでいる「蜑民」の女性も、炊事、掃除、子育て、洗濯など主婦としての仕事をこなす上に船をこぎ、漁業にたずさわる。そして漁が終わってから、魚を陸上に持って行って売るのもみんな女性です。その間男性は船や港町のストアで休んでいる。広東の旧社会というのはどうも女房がしっかりしている。だから亭主どもは家を離れて革命にうつつを抜かしていられるのだと冗談に言うんですが、今も昔もそれぐらい強い女性が多いというのが私の印象です。

広東は他の福建とか海南島に比べて、早くから女子が海外に移民したところです。王朝時代、中国の儒教的な考えでは、女性はあまり戸外に出てはいけないと教えたのですが、広東ではその時代から女性が戸外に出る、野外で働く、そのため纏足をすることが少ないという、中国では異色なところではなかったかと思います。強い女性が早くから海外に出て行くので、他の地方出身の「華僑」社会に比べると女性の人口比が比較的高かった。このことが男性に海外定着を促す。これが広東が今日でも「華僑」人口が最大である理由の一つではないかと私は思っています。

3. 珠江デルタの桑基魚塘と女性移民

広東女性で海外移住の先陣となったのは、日本の唐ゆきさんに相当する「豬花」（ちょか）です。これについては一冊にまとめたものがありますの

で、きょうはお話ししません。「豬花」に続いて海外に出た女性のことを少しお話しいたします。広東省の珠江デルタはご承知のように三角州ですから、雨量が多いときには洪水に襲われるわけです。洪水から畑や田を守らないといけない。一方、日照りになっても困るわけです。この環境を克服するために考案されたのが「桑基魚塘」です。先ず土を掘って池＝養魚場をつくります。そして掘ったその土を周囲に盛り上げて堤防をつくる。そうしておいて、堤防の部分に桑を植えたり、サトウキビ、あるいは野菜などを植えます。桑を植えれば養蚕ができ生糸を生産できる。サトウキビを植えれば砂糖ができる。というように商品作物を生産できる。

一方、池のなかにはいろいろな川魚を入れます。池の上の方には植物プランクトンで育つ魚、中層には浮き草を食べて育つ魚、そして底には底さらいをする魚と組み合わせて養殖するわけです。もちろんこの魚は市場に持って行って売ります。そしてときどき養魚場の底をさらって、堤防の上に乗せて肥料とします。また生糸をとったあとの繭からはサナギがとれます。サナギもこの池のなかに放り込んで川魚の餌とします。同じように野菜の屑なども池に入れてやると、草食性の魚が食べます。そういう一連の食物連鎖を利用して、ここでは普通の農業だけでなく多角的な経営をしていました。これが桑基魚塘で、これについては日本でも早くからいくつか研究されています。

今日では工業化の影響を受けて変貌していると思いますが、歴史的に桑基魚塘でいちばん有名であったのは順徳県とか南海県、番禺県など、広州の南の方です。順徳県は特に桑基魚塘のおかげで比較的富裕で、女性の識字率も高いという、旧社会では非常に珍しい地域でした。この一帯の農村で結婚をしない女性たちがたくさん現れました。結婚をしない誓いを仲間で立て合った女性のことを「媽姐」「金蘭契」「金蘭姉妹」「結契姉妹」「孤婆」などと呼びました。2種類あって、一生涯嫁に行かないという誓いを立て合い、仲間が娘宿で一緒に暮らすという「自梳女」（じそじょ）のグループ。もう一つは「不落家」といって結婚はするのですが、結婚の実はなく、夫と一緒に暮らすのはずっと後のことになるグループです。後者の場合、

祝言をあげるとき、仲間が布切れを当人の身体にグルグル巻きつけておき、結婚式が終わり次第サッサと娘宿に連れて帰り、夫をなかに入れない。どちらにしてもこの風潮は親の言うことを聞かず、結婚しないという点で反儒教的です。また次世代の子どもを生まないという点では、反社会的です。したがってときどき地方官の取締りがあるわけです。ところがあまり厳しく取り締まると、仲間で集団投身自殺をする。あるいは砒素を手に入れて自殺するということが記録されています。

「自梳女」「不落家」がなぜ生まれたかについては通常、この地帯の製糸工場（生糸を紡ぐ工場）で賃金を得て女性が早くから経済的に自立でき、その経済的自立を基盤にして結婚しない風潮が起きたのだと説明されています。ところが養蚕農家の女性が製糸工場で働くことができるようになったのは 1872 年頃からです。それ以前、農家は自分の家で繭を煮沸して、自分で生糸を紡ぎ、その生糸を商人に売ったわけです。ですが 1872 年頃からこの地方に機械制の生糸工場ができると、農家は繭を売るようになって、自分で生糸を紡がなくなるのです。この段階ではじめて余剰労働力となった農家の女性が工場に吸収されていくことになるわけです。境目になるのは 1872 年です。ところが機械制生糸工場ができる以前、具体的には 1810 年代から自梳女の風潮が認められるので、養蚕以外にいろいろな要因があるにちがいないのです。この研究の先達者の一人トプレイ（M. Topley）博士なども、女性にとって結婚すると不利益になるような条件は何かとか、結婚しないほうが有利な条件は何かということから論じています。その詳しいことは申し上げる時間がありませんが、女性の問題はその時代や社会を映す鏡だと言われます。日本の戦後改革も中国の革命もこの間のアフガンの問題もそうですが、革命とか社会変革になると必ず土地とか女性の問題がまっ先に取り上げられます。ということは、女性とか土地の問題は、その社会や時代の姿をいちばんよく反映しているからです。自梳女の発生についてはいろいろ詰めていく必要があるかと思いますが、広東が福建と同様商業化した農村、開かれた社会だったことも一因ではないかと思っています。

自梳女の女性は故郷を離れ、海外の「華僑」社会、または中国の諸都市、香港、上海とか北京に行き、住み込みのメイドさんになります。住み込みだと食事や住居の厄介がなく、独身の彼女らにとって都合がよかったのです。中国の旧開港場とか東南アジアの主要な都市の、富裕な中国人とか外国人の家庭で働いているメイドさんを、中国語でアマと言いますが、大体が順徳県の結婚しない自梳女たちでした。広東蚕糸の最盛期は1890年代から世界恐慌期までですが、20世紀初めにはたくさんの女性たちが広東から東南アジアに移住しました。ここに統計がありますが、香港一港だけでもメイドさんとして出国する女性の数が1906年に3,533人、1907年には2,619人、1920年には2,833人という膨大な数になっています。1930年代の世界不況でシンガポールが中国人男性の移民を割当制（クォータ制）にして制限します。すると制限を受けなかった女性がさらに移民していきます。海外移民を見る場合、同国人の女性がどの程度移住しているかを見ると、その人たちが一時的な居住者なのか、それとも居住国に定着して根づく要素になるのか一つの判断材料になると思います。

4. 新華僑の時代

「華僑」社会からはいろいろなことが抽出できるわけですが、いま日本にはご承知のように中国人だけでなくて、韓国人もフィリピンやタイからも、いろいろな人が入っています。中国人に問題を限ってお話を続けますが、とくに1970年代末の中国の改革・開放政策以降に中国からやってきた人には「新華僑」というカテゴリーを与えています。つまりそれ以前の「華僑」とは数も違うし、職業や来日目的も違う、出身地も違うからです。その詳細についてはお話しできませんが、急速に数が増えています。日本の中国籍人口は、80年末には5万3,000人でした。90年には15万人、94年には22万人近くになった。そして97年には25万人を突破しました。この数字は外国人登録をした中国人だけです。これにオーバーステイの人、短期滞在者やあるいは密入国したと思われる人を足すと、2000年には40万人ぐらいが日本にいるとの推定があります。

こういう中国籍人口は、しばらくは減ることはないだろうと思います。というのは、中国の海外移民はまず華商型—「華僑」商人から始まり、その次に労働者主体の華工型へ変わっていきます。19世紀末になるとナショナリスティックな、「我等中国人」という意識の強い「華僑」が出てきます。そして華裔型——これは「華僑」の後裔という意味です——という現地生まれの人たちに引きつがれるわけです。それに加えて中国籍を放棄して現地の国籍になる華人型が出てきます。「華僑」を発生順に並べてみると、こういう順序になるというのが通説です。この「華僑」の発生を中国人口史分野の研究成果と照合してみますと、中国の人口急増と歩調を合わせているかのようです。まず華商型はちょうど11世紀の前半、中国の人口が1億人に急増した時期です。その次の華工型は18世紀です。これは一億数千万の人口が一躍3億人に増大した時期で、清代の中期に当たります。銀が中国に入ってきて、経済が活況をおびた時期です。この時代になって、いまのカリマンタンには中国人の共和国ができるぐらい、労働者を中心とした人が海外に出ていきました。スペイン統治下のフィリピンで農業開拓が中国人移民によって始まったのもこの頃です。この労働者の外流が、阿片戦争後に続いていくわけです。また第三の人口急増期と言われているのは社会主義中国のもと、つまり現代で13億人です。こういう人口の急増と歩調を合わせるような海外移民の活動を考えてみますと、日本の景気や移民政策に大きな修正がないかぎり、日本にやって来る中国人が急速に減る要素は少ないだろうと思います。

新華僑の人がどういう特色を持っているのかといいますと、だいたい首都圏に集中しています。東京、神奈川、埼玉、千葉です。千葉県には中国籍人口の5.5%（1999年）が集まっています。首都圏集中に変わりないのですが、だんだん地方に分散する傾向もでています。また出身地をみると、トップであった台湾が上海に逆転され、次いで黒龍江・遼寧・福建・吉林・北京・江蘇・広東となります。東北三省つまり昔の満州からの来日は新しい現象ですが、たぶん中国の残留孤児の家族が東北三省出身の新華僑を増やしている原因だろうと言われています。われわれが中国人と隣り合って

住む、あるいはたくさんの留学生・就学生と共に学ぶ状況は、今後も急激には変わらないだろうと思います。

隣人として中国からの移民と一体どういうふうに接していくのか。言語も文化も異なり、異なる歴史を背負ってきた人とどう隣り合って過ごすのか。どう接合していくのかということは、われわれの日常生活で非常に大きな課題です。日本では晩婚化、あるいは未婚化という傾向が強いのです。また仮に結婚しても、夫婦の出生力は非常に低下している。日本ではこれから数年すると、人口が頭打ちになる。それからだんだん減っていくわけです。そして何千年もすると日本人はゼロになるという推計が出ていることは、ご承知の通りです。政府は「少子化対策プラスワン」という手を打っています。それでも限度があり、それを補うのに女性の未利用能力の開発とか、あるいはロボット産業のことが言われるのですが、ロボットは子どもを生まないのです。少子高齢化の人口現象に歯止めがかからない以上、海外からの移民に頼らなければならない。すでに相撲のような国技の世界でも外国出身力士に頼っているのです。ハワイとかモンゴル勢だけではなくて、中南米やブルガリア、ロシアの人まで大相撲をめざしていると新聞に出ていました。

これが日本の現実であるわけですが、私はあまり楽観はしないけれども、また悲観もしません。というのは、日本のもの作りと中国人の商才が接合して出来上がったのが、ご承知の通り回転寿司です。台湾出身の江川金鐘（旧性陳）さんが大阪の回転寿司システム開発者から専用許諾を得、東北機械金属のベルトコンベア技術者の協力を得て回転寿司を企業化したのがいい例です。接合の仕方が問題なのです。決して悲観はしません。われわれと異なる文化を持った人たちとどうつきあうか、私はそれについて平凡な答えしかできませんが、われわれとは文化が違うことをまず認識する、違いを知ることから始まるのだろうと思います。きょうは「華僑」研究から感じた中国人性を二、三お話しし、日本人との違いをあげました。この学科は国際協力科ですが、お金を持って外国に行き何かお手伝いをする学習をすることだけが国際協力科ではないと思います。外国語、外国事情の学

習を通じ日常生活のなかで異なる文化を背負った人たちと接しても、決してたじろがない学生をつくることも、この国際協力科存在の一つの意義ではないかと考えています。皆さんはどういうふうにお考えになりますか。ご意見があればお聞かせいただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

司会　ただいま可児先生から、「華僑」をめぐる非常に興味深いお話があり、歴史的な問題、現在の問題を含めてお話をいただきました。若干時間がございますので、これから質疑応答をさせていただきたいのですが、ご意見のある方、質問あるいはコメントのある方は挙手をお願いします。

質疑応答

質問　いまの日中関係のなかで、靖国問題は大きな問題だと思いますが、可児先生はどうお考えでしょうか。

可児　まずきょうの話に直接関係のある質問をいただきたいのでお答えしかねます。

質問　本日は私どもに少し馴染みの薄い問題でしたが、分かりやすくご説明いただき、大変ありがとうございました。初歩的な質問で恐縮ですが、「華僑」というのは移ったところで永住して子孫を増やすことになるのでしょうか。あるいは、いずれは本国に帰るという生活をするのでしょうか。

可児　私が知っている限りでは、ごく古い時代の中国には中華世界という考えがありました。「華僑」はごく古い時期には「住番」という言葉で呼ばれました。中華の地を離れ、番地（蕃地）住まいをするからです。一時出稼ぎに行って生活を立て直すのだけど、晩年は中華の地に帰って余生を過ごすのが理想だったわけです。これを「落葉帰根」と言います。葉っぱが落ちたら根っこに帰る。つまり年をとったら国に帰るという意味です。ところが実際には理想どおりにはいかないのです。というのは、お金を儲けたら、大きな利権を捨てて国に帰るのが惜しくなる。また失敗して零落

してしまえば、帰る金がない。だから現実には帰る人は限られてきます。

ただし、これは国や時代によってずいぶん違います。第2次世界大戦までは、東南アジアにはヨーロッパの植民地がたくさんありました。ところが戦後それらの国が独立しますと、現地ナショナリズムが起こります。そうなると、「華僑」も中国籍を離れ居留する国の国民になって定着しない限り居づらくなってしまうのです。それでマレーシアでもベトナムでもインドネシアでもそうですが、現地国家に帰化してその国の中国系国民となる人（いわゆる「落地生根」）、帰国する「華僑」、旧ヨーロッパ宗主国やその他に再移民する「華僑」、「華僑」身分のまま現地にとどまるものなどに分かれました。現実にはその国の環境、その人の考えでどれを選択するか違ってくるわけです。

日本は閉鎖的な「華僑」政策を取ってきましたから、あまり住みつきたくない。でも肉屋さんに行くと内臓をただでもらえる。中国では内臓のほうがはるかに高く、肉は安い。こんないい国はないと言って、その理由だけで日本に留まった人がいたぐらいです。戦前のことです。こうした類の日常生活条件から日中の政治環境、国際環境にいたるまでさまざまな条件が働く。日清戦争のときはほとんどの「華僑」が帰ってしまった。その環境しだいで多様に変化するのです。中国が社会主義化した段階では帰国しない「華僑」が大勢いました。しかしいまの中国では、さかんに中国のすぐれた海外人材に国に帰れと呼びかけています。中国に帰って活躍の場があるということで、帰る人もある。というようにいろいろ波動しているので、いちがいには言えないと思います。

質問　きょうは可児先生のお話を私は初めてうかがいまして、大変嬉しかったです。私はベトナムの中国人の問題などもいままでやっておりますが、先生のお話の一つ一つが私が見ておりましたメコンデルタの中国人の様子にはね返ってきまして、いい勉強になりました。ありがとうございました。可児先生と5年間も一緒におりましたのに、先生からこういうお話を聞く機会が持てなかったことを、私自身、非常に残念に思っております。ただあと半年ぐらいありますので、どうぞよろしくお願いします。

先生は世界的にも著名で、日本ではもちろん「華僑」の権威でいらっしゃるわけですが、「華僑」研究はご自分の研究の新しい分野だとおっしゃいましたが、今後の「華僑」研究を展望して、どの辺がいちばん面白そうだという感想をお持ちでしょうか。もし伺えましたら大変嬉しいのですが。

可児　それが分かっていれば私もさっさとやるのですが。どうでしょうか、やはり経済学とか政治学の方にリンクした研究が日本ではいちばんやりやすいのではないでしょうか。私の「華僑」研究はきわめて特殊です。冷戦時代に residual China（残された中国）という言葉がありました。私は歴史メジャーで、最初お話ししたようにタコ、鵜飼、家船とか蜑民をやって感じたことなのですが、これらの歴史については文字の記録が非常に少ない。ですから私の歴史研究は記憶というものと合併させないと仕事が進まないわけです。記憶というのは人びとの記憶だけではなくて、口伝えもありますし、祭りとか慣行あるいは年中行事のなかから読み取るものもありますが、そういうきわめて特殊な分野です。

この立場で言いますと、「華僑」研究というのは中国大陸の社会主義の傘の下にはない社会の研究です。つまり社会主義の傘の下で失われたようなさまざまな伝統的な中国の体系とか信仰、生活様式、祭りといったものが海外の「華僑」社会に残っている。これが前にのべた「残された中国」です。台湾とか香港も同様です。「残された中国」で歴史と記憶とを組み合わせていくので、私の「華僑」研究は異端と言っていいぐらい傍流です。お若い方は、これからはぜひ「華僑」研究の主流のほう、経済学とか政治学の側から研究されたほうがよろしいのではないかと思います。あるいは社会人類学などのような観点がよろしいかとも思いますが。学生に冗談に言うのですが、「華僑」研究をやっているといいよ、世界中どこに行っても「華僑」はいるから、研究のテーマに事欠かないし、たいてい中華料理店があるからおいしいものを食べられるよ、と。傍流の分野で「華僑」研究をしておりましても美味にありつけるのは事実ですが、経済学の方、あるいは政治学の方とご相談なさるほうが本筋だろうと思います。

（2002年11月28日）